

竜りゅうになつたお人形にんぎょう

むかし、むかし、那珂川の東、大木須に一人の長者様がおつてな、屋敷は白い塀を廻らしたおおきな家だつたと。門の前は、長者屋敷へ出入りする人や馬でそりやあ、賑やかだつたと。

何時の頃からか、近くの松倉山にあるほらあなにな、山賊が住み着いたと。そして、旅人を襲つたり、村へ押しかけて物を奪つたりと、乱暴を働いているんでな、村の人は恐ろしくて夜も眠れなかつたと。長者様もそれはそれは頭痛めていたんだと。

ところでな、長者様には一人の美しい娘がおつてな、この娘、人形が大好きで自分と同じような、おおきな人形を作つてもらつて、たいそう可愛がつていたそつな。

ところが、こともあらうにこの娘を山賊のお頭が見初めちまつてな
「嫁に貰いたい」
と、何度も使いをよこしたと。だけど、そのたんびに

「一人娘は嫁に出せん」

と、追い返したと。お頭はどうとう怒つてな

「娘を嫁にけれなければ家・屋敷に火をつけるぞ」

と、脅かしてきたんだと。長者様はたいそう困つて頭抱えてしまったんだと。

それを見ていた娘はな

「お父様、火をつけられては使用人や村の人たちに迷惑が掛かります。わたし、お嫁に行きます」

と言う娘の覚悟に、悩みに悩んだ末に、嫁にやることにしたと。

いよいよ嫁入りの日、山賊たちはお頭を先頭にやってきて、座敷に上がり、酒をがぶがぶ、さかなをむしやむしや、あげくには酔っぱらつて好き放題。やがて夜も更ける頃、嫁様乗せた籠担いで大喜びで帰つて行つたと。

お頭は籠を開けて、

「だ　だ　だましたな！」

なんと、そこには嫁様ではなく人形が座つていたと。

お頭は人形をひつつかんで山を駆け下りた。そして、近くを流れる木須川へドボーン

と投げ入れた。人形は「とっぼり、とっぼり」と流れていったと。

ところが、ピタツと流れが止まり、ドドーと押し戻して来たと思うと、人形は竜となって長者屋敷へと飛んで行った。山賊たちはそんなことには目もくれず、

「娘をよこせー」

と、長者屋敷めがけて駆けていったと。

息せき切って長者屋敷に着くと、門の上には竜が赤い舌を出し、大きな目で睨めつけていた。裏門に回れば鎌のような爪を振り上げ今にも飛び掛かろうとしていた。山賊たちはどうにも屋敷には入れず、恐ろしくなり、ほらあなに逃げかえって行ったと。

しばらくして、山賊たちは村へ出かけようと、ほらあなから首をだしたらな、目の前になんと、竜がとぐる巻いて待ち構えていたと。一歩も出られない山族たちは、とうとう食べ物もなくなり、「こそこそっ、こそこそっ」、一人また一人、ほらあなから抜け出し、ついには、一人もいなくなったと。竜もいつのまにかどこかへと姿を消した。

それから村はもとの平和な村になってな、長者様の娘は、やがて隣村から立派なお婿さんをもらって幸せに暮らしたってさ。

おしまい

旧烏山観光協会発行「からすやまの民話」より